

草の芽句会だより

NO,169
22,9,1

噴水のいくつあり濠の水青き
変わりやすき朝の天気や九月なり

節子

マスクして二百十日の城歩く
秋来たる会話はコロナばかりかな

貞子

一粒の葡萄露ごと舌にのせ
葉の枯れてほおずき色を灯しけり

文子

幼子の親にかくれる夏帽子
早咲きの紅萩風もなく揺れて

範子

蝸の声と聴き分く城の朝
秋蝶の飛び立ち木々に紛れゆく

純子

秋草の花の小さき城の径
更けてより湯舟につかる虫の声

禮子

遍路径昔のままに夏蕨
新涼の見返り坂の空青し

剋子

出席者 氏家 大黒 川原 吉崎 馬場 森 小山
投句者

今日から九月。暑いけれど気分的になんだか秋を感じるの青く澄んだ空のせい？「萩はまだかしらん」萩園へ回った友から「紅白の萩が突っ立って咲いとったよ、枝が垂れんとらん」
「猛暑で萩もおかしくなったんやろか」うるし林のベンチでしばし濠の風を楽しむ。足元に鳩が寄ってきて木の実を啄む。「この鳩は人を怖がらんなあ」「やさしい人は鳩にも解るんやろか」
「あつ、蝸が鳴いたで」「二の丸辺りかな？」「又鳴くやろ、待ってみようよ」 蝸が鳴けば夏も終わりに近い。今年の夏も私達はなんとか乗り越えたみたい。

部屋に戻ると冷たいコーヒーと美味しいお菓子、それにお喋り。月に一度の句会は、私達にとって至福のひと時である。オシヤレをしてお出かけ、ディナーへの誘いなどは卒業してしまつた。月に一度、好きな俳句をつくり気のおけない友人たちとお喋り、私達は慎ましくありながら今、人生を謳歌している気がするのである。

